

報 會

復 刊 第 2 号



Hartman Schedel "Liber Chronicarum", Nürnberg 1493.

京 都 大 学 地 理 学 談 話 会

1991

一昨年行われた講座開設との関連で本年4月1日より当教室に着任いたしました。紙面をかりて同窓の皆様にご挨拶申し上げます。

1958年学部卒、63年大学院博士課程退学、66年まで当教室助手、67～70年愛知県立大学に、以後大阪市立大学経済研究所に勤務というのが私の略歴です。これからお分かりのように、これまで20年間私は本務としての教育から離れておりましたし、経済研究所での担当は地域経済研究部門の都市地理でありましたが、大都市問題のうちもっとも関心あるテーマに取り組んできましたので、体系的に地理学について思考することはありませんでした。したがって伝統ある当地理学教室の教員となるに際して私の気持ちは表題のごときものでありました。私の研究している欧米の大都市現象の中に「都市回帰動向」(back to the city movement)というのがあります。これは70年代後半に、それまでもっぱら郊外の新しい住宅地を嗜好していた中上層の人々のうち、ヤッピーと呼ばれる若い専門技術職を主体とした人々が、衰退化の道を辿る大都市圏中心部を居住地として指向しはじめた現象であります。大都市の魅力積極的に再評価し仕事と生活に生かそうとする人々が現れたのです。そのことが大都市再生の兆候とみなせるかどうかは、成熟した先進国大都市の将来に係わる重要な論点となっています。

私はヤッピーのように若々しくありませんし、地理学教室は衰退とか再生とは無縁でありましょう。つまり、都市回帰者ほどには主体的な意欲が十分でなく、迎える側も切実性や期待感を持ちませんから、私の地理学回帰が都市回帰のアナロジーたり得ないことはいまでもありません。ただ正直なところ私は20年前に経済研究所(郊外?)に入所して、「地理学とは何ぞや」という重圧からやっと解放されたという思いをもちました。それにもかかわらずこの度、80年余にわたりわが国地理学界の中核の一つとして存立してきた当教室(中心都市?)に赴任するのですから、そこにはかつて在籍したときには感じられなかった、あるいはこれまでの職場にはなかった新しい魅力があるはずです。地理学とは何かを問いつづける若い学生諸君との教師としての接触や、これまでの同僚とは異なる思考方法や視角をもつ研究者との交流がそれでありましょう。それに当地理学教室は再生をせまられてはいなくとも、比較的

新しい他大学の地理学教室に比べて成熟していることは確かであります。教育と研究の場としての大学は周知のとおり社会の厳しい評価と激しい相互競争にさらされつつあり、当教室も意識的に新たな展開を図らねばなりません。そのために、オーソドックスな地理学研究の道から少しはずれた所を歩んできた私の存在がなんらかの刺激となり、多少とも寄与できればというのが就任に際しての私のひそかな願いであります(もっとも、タイム誌最近の報道によりますと上記ヤッピーですらもはや古代人と評価されているようです)。

教室の運営については、先生でベテランの応地教授、金田助教授と山崎助手がおられますし、教養部担当の足利、青木両教授と山田助教授にもサポートしていただいておりますから、内部的にはなんら心配はないでしょう。ただ講座増にともなって学生定員も20名と倍増いたしましたから、講義内容の多様化や卒業生の進路に関連して、いままですら以上に同窓の皆様にご助力をお願いしなくてはならないでしょう。私はこれまで皆様方に疎遠でありがちだったため、虫のいいお願いだと思われまじうが、本地理学教室に忌憚のないご意見とともに暖かいご支援をたまわることができれば幸いです。

(成田 孝三)

「八洲会」のことども

大島 襄二

私ども8人が京都帝国大学文学部史学科に入学したのは昭和16年4月のことでした。その年の12月に開戦となったのですから、結果的に戦前に大学生となった最後の学年です。すでに小牧実繁先生は『日本地政学宣言』を世に問うておられたのですが、私どもは先生の講義「探検の地理学」(のちにラジオ新書として公刊)に啓発されたものです。先生が今西錦司先生(動物学)に協力して組織されていた探検地理学会のことを語り合える人が少ないのが残念ですが、ボナベ島調査には地理からも数人が加わるようになって、一回生では川喜田二郎、伴豊両君と私が予定されていました。のちに、小牧・今西両先生の意見の喧嘩から地理のメンバーは計画から下りることになったのは私にとっては残念な事でしたが、個人的にはその縁で私も今西グループの多くの友人を得たのでした。

一回生の冬休みに私は河合喜久男君と雪の北海道を歩き

廻りました。夜行列車を多用する計画だったのですが、小牧先生から「地理学をやる者は昼汽車で移動しなさい。窓から景色の移り変わりをすることが大切です」との注意を受けました。のちに、「景観こそが教科書である」ということを。サウアーのパークレイ学派がスローガンにしていたことを知って、小牧先生の言葉を思い出したものです。

戦争のため学制が短縮され、二回生の学年末試験は9月となりましたが、満州・熱河への単独行を企てた私は、左右の腕にかわりがわりにコレラ、チブス、ペスト等の予防注射を受け、答案を書こうにも手がだるくて熟っぽく、悪戦苦闘したものです。伴君が「これから行方不明になる」というハガキを教室に送って蒙古への国境を越え遊牧民の群に投じたのもこの頃です。

三回生では卒論の前に実地調査を踏まえた卒業論文というのを室賀信夫先生から課せられました。私は小池洋一、斎藤吉吉両君と能登半島の西海村を調査して3人共同のレポートを出すことにしましたが「3人で出したなんていまままでありませんよ」と先生を困らせたようです。その春に金沢で受けた徴兵検査の検査官だった陸軍将校に能登飯田の駅前旅館で同宿となり、「おお、お前か」と思い出して、当時民間人の私どもでは入手困難だった牛肉を差入れてくれ、久しぶりにすき焼きを腹いっぱい食べたものです。

「八洲会」という名をいつ付けたか覚えていませんが、京都帝国大学八洲会という名を入れた500字詰めという原稿用紙を東山仁王門の印刷屋で作らせ、全員がレポートも卒業論文までもこれで書きました。野間三郎先生から卒論試問の時に中味は聞かれずに「八洲会って何しやる会ですか？」と訪ねられた人もあります。シベリヤとか蒙古とか東南アジアとかバーレーン島とか、文字どおり八洲(?)を股にかけた卒論の多彩さでしたが、私もアンドレ・シークフリードのフランス語に取り組んでアメリカを書いたものです。「南北アメリカの史的展開と現状」という大論文でした。

行動派が多く、いつも誰かがどこかに出かけていて、8人が授業に揃ったことはほとんどなかったのですが、卒業式には8人が揃いました。仲間の中で私どもより10歳ほど年長の船越謙策君のお宅で、その晩この八洲会の解散式をしました。9月卒業で10月1日には入営が決まっている人々が大部分でした。寒が盛り上がったその夜なのに、私は名状し難い憂愁を覚えてこっそり座を外し、裏手の賢茂川堤で夜風に吹かれていたのを、船越夫人が心配して呼び戻

しに来てくれました。

私は残留組でした。大学院に籍をおき、副手として研究室の留守番役をしましたので、当時訪ねて来られた先輩方ともお見知り頂くことになりましたが、その何人かはその時の軍服姿を最後に還らぬ人となりました。八洲会でも三田民夫君が戦病死、伴豊君はフィリピンで今度こそ永遠の行方不明となりました。

食糧不足の中で陳列館の中庭もいも畑にすることになりました。短冊型に南北に細長い五つの地割を国史・東洋史・西洋史・地理・考古で割るのです。いちばん東は朝の日当たりが悪く、西側は午後は日陰になります。各教室の命運をかけたくじ引きに、地理からは私が出て、無事、東から二つ目のいいくじをあてました。いも苗は室賀先生が山科の農家に手配して下さって、三上正利さん、岡本啓志さんと私で大八車で引いて来ました。小牧先生以下全員で植え付け、毎日、水をやりながら、隣の考古学は順調だ、西の西洋史は枯れそうだと、と教室対抗の競争意識でのいも談義でした。その収穫を見ることなしに私も赤紙で舞鶴海兵団に召集されました。非常勤で行っていた同志社女学校の教壇で挨拶して別れ、昭和19年7月1日に海軍に入ったのです。

入学後50年というこの4月、八洲会は久しぶりに楽友会館に集うことにしています。

研究室のページ

本年度は、9名の学部新専攻生、5名の修士課程進(入)学生を迎えました。

各自に一言づつ自己紹介して戴きました。(敬称略)

学部新専攻生自己紹介

《 足立郁子 》

神戸出身です。自分は地理のことを全く知らないんだ、ということをはしひしと感じる今日この頃。なかなか前途多難です。サークルは、ハイマート合唱団に入っておりまして、がんばって両立させたいと思っています。三回生中女の子ひとりということで、たまに寂しいよーと思います。・・・どうぞよろしくおねがいします。

《 大平晃久 》

何となく高校時代に地理をやろうと決めたものの、その後名大を経て現在に至るまで、地理に対する興味は揺れ動いて、今は何をしたらいいのか悩みきれていないのが現状です。また、オリエンテーリングクラブで活動しています。(オリエンテーリングについては山岸倫也「オリエンテーリングと地図」『地図』26-2を参照下さい。)

《 米家泰作 》

「こめいえ」と読んで下さい。奈良県の北西、生駒の出身です。暇さえあれば、バッハを聴いたり、笛を吹いたり、あるいは山歩き野歩き川登りを好んでする癖があります。一方現代人の常識に欠け、いちいちずれたところもあるので、皆様当惑されることもあるかもしれませんが、どうか気にせず、よろしくお願いいたします。

《 神力弘幸 》

遠い北の国より京に上りてはや2年、つつい易きに流れる日々で、すっかり怠惰になってしまいましたが、こちらで立て直しを図りたいと思っております。劣等生ではありますが、どうかよろしくお願いします。

《 中山耕至 》

私は人文地理学についての知識はほとんど持っておらず、積極的に地理学専攻を選択したとはいいいくいので、これから自分が何をすべきか、自分が何をしたいのかまだよくわかってないのですが、環境破壊に少し関心があるため、自然と人間はどう関係しあえばよいのか、ということについていくらか興味をもっています。その他には生物学に関心があり、特に魚類の生態などが好きです。

《 西山隆彦 》



《 堀 健彦 》

三重県中部の生まれ。高校時代に地理を履修していなかったものの、大学入学後、色々考えるうちに地理学を学びたいと思い、専攻しました。ただ、高校地理の知識が乏しいため地名や国名等にうといのですがこれから徐々に覚えていこうと思っています。趣味・特技といったものは特にありませんが旅行やハイキング等、色々見て回る事が好きです。どうか宜しく御願ひ致します。

《 松枝法道 》

初めまして、松枝といいます。出身は岡山県の笠岡市で、広島県に隣接したのんびりとした暖かい所です。そういった気候は、人の性格に反映するものでしょうか、のんびりし過ぎて大ざっぱな性格は地理学と反発を起こしている近頃です。地理学と接するのはほとんど初めてのことで基礎的知識の無さにガク然としています。一番興味を持っている分野は都市計画の方面で、特にアメリカ西海岸の都市の High Life な環境づくりを特に学びたいと考えています。大学入学以来、1年目はゴルフ部で山をかけめぐり、2年目は、国際親善のクラブにお熱をあげて、文字どおり「勉強」の“べ”の字もしませんでした。2年間、一から出直してがんばろうと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

《 山口岳夫 》

ただ1人、4組出身の山口岳夫です。友達が少ないので、仲良くしてやって下さい。出身校は地元洛星で、高校よりも近くの大学に入ってしまった。趣味はスポーツ全般とクイズで、勉強はあまり好きじゃないです。しかも、語学は苦手で読書も好まないで、どこが文学部やねん、とツツコンで下さい。将来の夢は何故か小学校の先生になることです。ボンコツ車と派手な単車が私のアシです。それではよろしく。 P.S. 歌うのは好きです。

修士課程入(進)学生自己紹介

《 伍 瑞琮 》

皆さんはじめまして、香港からまいりました、伍 瑞琮(ウー シュイキン)と申します。「琮」という字は日本の漢字の中にはないので、先に皆さんに説明させていただきたいのですが、「琮」というのは中国でもっと

も珍しい翡翠なのです。さて、これから二年間は、大学院修士課程で日本の歴史地理学を研究したいと思っています。よろしくお願い致します。

《 佐藤麻也 》

南島における人間と環境のかかわりの伝統的なあり方を、沿海部の環境利用を中心に考えていきたいと思っている。スタティックな構造の記載のみならず、構造を変化せしめる人間活動の不思議に目をこらしたい。民族誌の記載と考古資料の操作法を学ぶことが当面の課題。

《 滝波章弘 》

姫路生まれ横浜育ち、横浜翠嵐高、慶応義塾大経由でこの春地理をたくて京大院に入りました。初めての下宿生活に少々疲れぎみですが、大学はおもしろいです。僕の趣味はテニス、芸術の映画、仏語に地理なのですが、前者二つは夏休みにと今は後者二つに集中しています。また、地理を地理学にしようとしているのですが、なかなか難しいです。

《 谷口美都子 》

この教室出身です。卒論では、民族集団の居住地の空間パターンについてシカゴ都市社会学からの研究を概観しました。修士課程では、都市のオープンスペースについて研究していきたいと思っています。水泳、ハイキング、園芸が好きです。どうぞよろしくお願いします。

《 渡辺浩平 》

工学部の衛生工学科を卒業して、この4月に地理の大学院に入学(入院?)しました。工学部では“上から降ってくる”課題に抵抗ばかりしていたのですが、いざそういうものがなくなると多少心細くなるものです。じきに慣れると思いますが。ゴミ問題が重大な課題だと思って大学に来たのですが、ただ技術的に対応するのではなく、地理学の視点からじっくり考えていきたいと思っています。

卒業・修了者の進路

・昨年度の学部卒業生全12名の進路は以下のとおりです。

青木秀和 岐阜県庁 瀬戸恒宏 東急電鉄
市川 文 JR西日本 人見釜世 日本製鋼所

岩部敏夫 太陽神戸三井銀行 山中一高 山陰中央テレビ
興津俊之 日本総合研究所 藤田 昭 文学部聴講生
小口 稔 光文社 佐藤麻也 大学院修士課程
坂部誠治 中部電力 谷口美都子 大学院修士課程

・昨年度の大学院修了者の就職先は以下のとおりです。

山崎孝史 京都大学文学部地理学教室助手(1990年6月)
小島泰雄 京都大学教養部地理学教室助手(1991年4月)

1991年度講義題目

講義	教授	成田孝三	人文地理学序説
”	教授	応地利明	地域環境学概論
*研究	教授	成田孝三	インナーシティ問題の比較研究
* ”	助教授	金田章裕	景観認識と景観形成
* ”	東南ア	高谷好一	地形の意味論
	研教授		
* ”	教養部	足利健亮	歴史地理学における資料批判
	教授		
* ”	教養部	青木伸好	地理空間の認識方法上の諸問題
	教授		
* ”	教養部	山田 誠	日本近代都市の地理的諸相
	助教授		
* ”	講師	塚田秀雄	北ヨーロッパの農業と農村の近代化
* ”	講師	日下雅義	自然地理学
* ”	講師	石川義孝	人口移動の地理学的研究
* ”	講師	堀 信行	アフリカ第四紀の環境変化と人類(集中講義)
演習	教授	成田孝三	地理学研究法
1	教授	応地利明	(3回生対象)
	助教授	金田章裕	
演習	教授	成田孝三	人文地理学の諸問題
2	教授	応地利明	(4回生対象)
	助教授	金田章裕	
講義	教授	応地利明	フランス地理学講読
”	助教授	金田章裕	ドイツ地理学講読
* ”	人文研	石川禎浩	中国学講読
	助手		(現代史学と共通)

実習 講師 森 三紀 地理学実習
 助手 山崎孝史
 △演習 教授 成田孝三 地域の諸問題
 教授 応地利明
 助教授 金田章裕

※印は大学院と共通

△印は大学院のみ

.....

1990年度(1990年4月～1991年3月)

地理学談話会 会計報告

【資金会計】

<収入>

年会費	380,000
銀行口座利息	1,328
前年度繰越	296,429
計	677,757

<支出>

運営費への振替	372,856
郵便振替手数料	20,580
次年度繰越	284,321
計	677,757

【運営費会計】

<収入>

資金会計からの振替	372,856
秋季懇親会会費	105,000
論文発表会会費	139,500
計	617,356

<支出>

秋季懇親会経費	96,264
論文発表会経費	139,348
名簿作成費	185,658
会報作成費	20,400
郵送及諸経費	175,175
計	617,356

お知らせ

1. 今年度は名簿の発行は行いません。住所変更など、名簿の更新には皆様のご協力をいただいておりますが、以下の会員の方の住所、連絡先が不明です。お心あたりの方は地理学談話会(京都大学文学部地理学教室)までご

連絡下さい。また、これらの方以外でも住所等の変更がございましたらご連絡下さい。

括弧内は卒業年(昭和)、敬称略。

朝井小太郎(6)	石角 強(45)
都子 (15)	福田 新一(46)
今井 平八(19)	西沢 仁晴(49)
田島 浪(23)	遠藤 正雄(53)
有馬もりよ(33)	詫間 洋二(54)
野田 茂生(36)	山口 一郎(55)
岡本 靖一(42)	松本 弘史(58)
太田 正孝(42)	

2. 尚、談話会年会費 1,000円をお支払い下さい。

編集後記

未知なる地への好奇のまなざしは、古来地理学の母でもありました。表紙に掲げた無頭人、巨足人、長耳人のグロテスクな図像は、15世紀ヨーロッパ人の旺盛な想像力の産物です。異文化理解の難しさとその重要性が改めて説かれる現代において、これを古風な荒唐無稽と一笑に付すことができるか、考えさせられるところです。

会報、復刊第2号をまとめるにあたって、ご寄稿いただいた先輩方はじめ、編集にご協力いただいた研究室関係者の方々に、厚くお礼申し上げます。今年度は、博士課程に進学した私ども二名が編集を担当し、体裁は昨年の復刊第1号に倣いました。こうした編集には不慣れなせいもあって不十分な点も少なくないかと存じます。会報の紙面にどのようなコーナーを設け、どのような情報を盛り込んだらよいか、忌憚なきご意見をお寄せ下されば幸いです。会員の皆様のご壮健を祈るとともに、この会報が、相互交流のための一助となることを願ってやみません。

(月原敏博、豊田哲也)

会 報 復刊第2号

発行日 1991年 5月30日

発行者 地理学談話会

〒606 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部地理学教室内

TEL 075-753-2793 (直通)